

西真寺通信

令和三年春号発行 西真寺

住職のつぶやき

昨年来のコロナ禍によって、生活様式が変わり、様々な職業に影響がある中、経済に対する不安や苦しみが湧き起り、落ち着きを取り戻せない状態が続いていることと思います。

私は二十年間務めた新潟の寺を昨年の4月に退職し、現在は会津屋に社員として勤め、火葬場で働いております。

なぜ火葬場で働くの？と会津屋の社長をはじめ、社員の方にも聞かれます。5年前に前住職が亡くなった際、総代から会津屋の会長と社長を紹介して頂き、その機会に新潟の寺を辞め、

会津屋さんにお世話になり、火葬場で働きたい旨を伝えてありました。しかし、新潟の寺の住職に、私の後任者が育つ迄、勤めてほしいと言われ、一度は断念しておりました。その後、癌を患い、以降週一回の勤めにしてもらい、今回ようやく願いが叶う形になった訳です。

坊主が葬儀屋で勤め、火葬場勤務となれば縁起が悪いと思われる方もいて、ある町内で噂になったそうです。

それは、古来より火葬に携る人々が差別されてきた歴史があるからでしょう。私が幼少の頃、火葬場の番人を「鬼」と呼び、蔑視されていたことも知っています。

ます。

それは、遺体を死体と見なし、常に他人事として捉えていたからであり、死を「穢れ」として扱ってきた日本のムラ社会の問題であります。この事が示しているのは、死を忌み嫌い、「ハレ」(晴れ舞台)を感情的に好んで我々が生きてきた証に他なりません。

実際に火葬場で、年配の方がお孫さんに「あれが鬼だ」と私を指さし、説明していた言葉を耳にし、嫌な思いをしました。

先日、三か所ある村上の火葬場の一か所で、長男の高校の同級生とその家族が、亡き人の見送りに来ていた場面に遭遇しました。しかし、その両親が私に気づかないので、こちらも知らない振りをしていたのです。

その何日か後、長男から、同級生が私に気づいていたことを知らされました。私は、無意識に、長男が同級生から父親の職業のことだからかわれるのを恐れていたのだと思います。

しかし、その同級生も長男も、私や周りが考えているような、穢れや鬼などとは無縁な視点から私を見てくれていたのです。心配無用なことであったと胸を撫で下ろしました。

私が勝手に自分を卑下していたことが分かり、職種を分別していたのは自分であったと、子供達に気づかされたのです。

私は、子供達の将来の為に、そしてお寺の将来の為に、あえてこの「穢れ」の闇と対峙し、人間の根本に潜む差別と向き合うつもりで、火葬の仕事を選んだことから、いつの間にか忘れていたのかもしれません。慙愧の毎日です。

「私は神さまも信じていますが、それではいけないのですか」 4
—親鸞の神祇不拝から学ぶ戦争—

3. 戦う国家と宗教教団の関係 —国家神道について

子安宣邦は、「戦う国家とは祀る国家である（中略）この国家によって死に追いやられた死者、そして国家が決して祀ることのない死者は靖国をめぐる美麗句が虚偽でしかないことを教えている。戦う国家は祀る英霊とともに祀られない死者を国の内外に大量にもたらすのである。（中略）**国家が祀る」ととは、国家が戦うこととともに差別的で排他的な自己中心的な行為である。**国家は己のためだけに祀るのである。（中略）もはや戦争とは国民のためのものでは決していないのだ。われわれは太平洋戦争によってそのことをおしえられたのである」（『国家と祭祀』と国家神道について論じて

います。

子安は、決して祀られることのない沖縄の人々の集団自決の例にしながら、戦争と国家観について提言しています。にもかかわらず、国家神道については、日本の負の部分であり、タブー視している方が大半でありま

す。さらに、沖縄戦で見捨てられた沖縄の人々と同様に、奥羽越列藩同盟の戦没者は靖国に祀られることはありません。

「祀る」の意味

① お供えをして儀式を行い、神を招き神を慰め祈願する『儀礼中心」

② 神として崇め一定の土地に安置する『人間を神とする原始宗教の特色を持つ民族宗教

③ 上位にすえ尊う人間に宗教的権威を持たせる

* 祀る宗教のまとめ

● 教義と創唱者を持たない原始宗教（民族宗教）

● 儀礼が中心で社会集団の長に宗教的権威を与える

● 社会的結合と宗教的結合が一致している

* 国家の意味

一定の領土と国民と排他的な統治組織を持つ政治共同体、当地を主体とする政府と統治を客体とする人民を含む場合と、政府だけを呼ぶ場合がある

* 国家神道—祀る国家の特徴

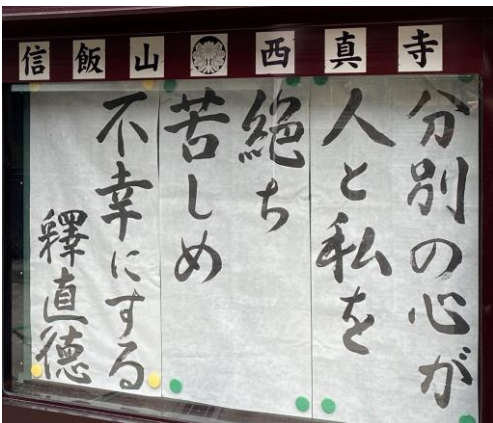
① 教義が無い為に統治する側の国家に都合のいいよう理念化して正当化できる

② 社会的な権力者が、宗教的権威を借りて独裁者として支配できる（独裁者の絶対化）

③ 権力者を中心に神の国を優越性として利用し、他国を排除できる（聖戦化）

村上重良は神話化による国体の優位性について次のように述べています。

神話は、疑うことを許さない事実とされ、ここに発する世界に冠たる国体の優位性への確信と、**神に率いられる日本民族という選民意識**が、排外的民族主義のゆたかな土壌となった。（太字・筆者）
（次号に続く）



死刑制度と悪を考える③ 親鸞の悪の捉え方

1. 死刑制度の現状

被害者の遺族は、恨みや嫌悪感情を全て加害者に向けることで、生きる目的を得ようとしますが、

処刑後の対象喪失により怒りの矛先を失い、目標さえも失くしてしまふのです。死刑執行にまつわる遺族感情は、執行前に抱く憎悪感情から変容の過程を辿り、決して満足される感情には至らないことが理解できます。

加害者が処刑されても被害者は戻るはずもなく、弟を保険金目的の殺人で亡くした原田さんは「僕を癒してくれる長谷川君を、死刑によって僕から奪ってしまったのです」(『弟を殺した彼と、僕』と被害者とのつながりを絶った国家を非難しています。また、「被害者の家族としては加害者を殺して、それでおしまいはあまりにも安

易すぎる。命の等価にすぎない。弟が加害者と同じ価値しかないということであり、それは我慢ができない。生きて、犯した罪に悩み、苦しみ、身悶えながら償いをまつとうして欲しい」とも述べています。

被害者の遺族すべてが死刑を望んでいる訳では無く、アメリカでは、被害者遺族の「和解のための犯罪被害者の会」(MVFPR)が死刑制度に反対し、被害者支援に取り組んでいます。また、「ジャーニー・オブ・ホープ」(希望の旅)では、被害者と加害者家族の旅を通しての交流運動があります。

被害者家族、加害者家族共に復讐では心は癒されずに、対立することを望んではいない点で一致しているのです。

(坂上香『癒しと和解への度犯罪被害者と死刑囚の家族たち』

殺人事件の唯一の証言者であり、加害者による罪を償う過程が遺族の心の支えとなっていたことが一転し、自分も国による殺人に関与し、同等な価値観である、やられたことをやり返した満足は、とても傷を癒すだけの効力は持ちえません。加害者と同じ殺人という手段にある価値に加担して得た虚しさは必ず残ることが原田さんのケースだと思われまふ。

被害者の家族にとっては死刑執行が終わりではなく、新たな苦しみの始まりに過ぎないのである。一時的な感情に同調することと善であるとすれば、その人の考えは、処刑後に遺族に始まる本当の苦しみに寄り添わず、共感することを拒否する結果にならないでしょうか。

自分の子供が殺されても、死刑制度に反対するのか?という死刑制度存置の方は必ず問いかけまふ。

1995年にオクラホマ市のアルフレッド・ムラー・ビル爆発事故で、二十三歳の娘ジェリーさんをウエルチさんは失いました。この爆発事故による死亡者は167名でした。ウエルチさんは死刑制度に反対していたのですが、爆発犯人を恨み、復讐の念に取りつかれました。悲しみと怒りに明け暮れた数か月後、亡くなった娘さんが「死刑執行はただ子供たちに憎しみを教えるだけだ」と生前に言っていたことを思い出しました。犯人の死を望む「憎悪」と「復讐心」こそが、167人の命を奪った原因であることに気づいたのです。

ウエルチさんは、加害者の父親に会い、加害者家族の苦しみと悲しみに触れ、自分と同じ苦しみを抱えていることが分かり、友情が生まれたのです。ウエルチさんは、「死刑は復讐を願う心に便乗しているだけだ」と講演を通して語り続け、死刑反対運動に取り組んだのです。

(次号に続く)

築地本願寺の経営学を学ぶ

テレビでも紹介された築地本願寺の現在の安永宗務長（代表役員）は、元三和銀行の行員を二一年間務めた経営学の博士号を持つ、在家出身で異色の僧侶です。

二年前の一月に新潟の組の僧侶研修会として、東京の母校を会場に開催し、恩師の講座を聴聞しました。その際、恩師が、築地本願寺で外国人向けに、英語で仏教教室を開いていることもあり、築地本願寺に参詣したのです。

築地市場が移転しているにも関わらず、外国人と日本人の観光客らしき人々が多く、一番目を引いたのは、サロンでゆっくり会話とティータイムを楽しんでいるご婦人の方々です。

また、ガラスで仕切られたオープン形式の研修室で、曹洞宗の僧侶研修会があり、安永宗務長が講演していたのは驚きでした。

新しく出来た宗派を問わない合同墓の建物は、近代アートの外観で、礼拝堂も併設してありました。その合同墓の生前契約は既に一人、合同墓に付帯する「築地本願寺倶楽部」の会員は二万人を超えており、予約で殺到している現状は、寺の今後の可能性を示唆しているようでした。

安永さんは、銀行のロンドン支局時代、欧米の人に対して「私は無宗教です」と発言すると、倫理観が無く、人を殺しかねない人間であると思われるので、「私は仏教徒です」と応えるようにと教わったそうです。このことから、宗教心の大

切さや「心の抛り所」である仏教を学ぶ契機になったのです。

築地本願寺では、寺の学び舎としての機能を提供するKOKOROアカデミーを創設し、「よろず僧談」を開き、様々な相談事にも対応しています。

この「よろず僧談」の傾聴活動は大変すばらしい取り組みです。私も、ホスピスの傾聴ボランティアや新潟の寺の月経（毎月の命日にお経を唱えにに伺う）で経験した傾聴は、自分の成長を含め、人とのつながりを構築する原点であります。

伝統や形式に縛られて前に進めず、衰退する寺社会に対して、ビジネスによる、本当に寺に求められる「心の抛り所」としてのニーズや経営学を持ち込んだ安永さんは、「お寺も宗教法人で株式会社と同じ『コーポレーシ

ョン』です。利益を株主に配当する代わりに社会に対して何らかの価値を還元するという意味で同じものです」とこれからの寺の在り方を示唆しています。

檀家制度の崩壊や寺離れが進み、コロナ禍で葬儀も法事も簡単に済ませ、生死の問題を軽く扱う風潮は「関係性の喪失」を招き、孤立感が深まります。この過程で、宗教教団は嫌いだ、坊主に話を聞いてもらいたいという要望は必ずあり、坊主に對する信頼感は政治家よりあるとするデータがある程です。

儀礼を重んじた葬式仏教より、知らない仏教を学び、不安な心をさらけ出しても、そのすべてを受け容れる「器」としての機能を持つ「開かれたお寺と僧侶」の一体化が今必要とされていると感じています。